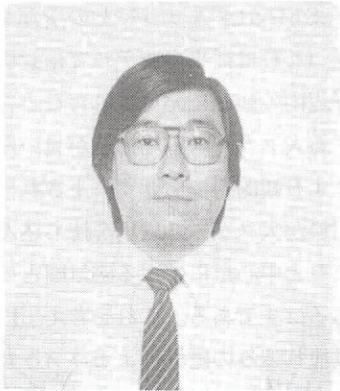


シンガポール国立大学を訪問して

齊木 幸一朗（化学教室）



日本学術振興会（JSPS）がおこなっている、拠点大学方式による東南アジア諸国学術交流事業の一環として、研究者の交換事業がある。平成2年度の派遣研究者として、7/24から8/2までの10日間、シンガポール国立大学（NUS）を訪問した。受け入れ側の窓口になってくれたのは同大学物理学科のK. L. Tan 助教授で、専門は筆者と同じ表面科学である。ちなみに同物理学科では Professorship を取るのが難しく、現在教授は不在とのことである。今回の訪問の目的は、表面

科学における情報交換、および今秋東京で開くことが予定されている JSPS-NUS 表面科学セミナーの開催打ち合わせであった。

シンガポールは今年、マレーシアからの分離独立による建国25周年で、筆者の滞在した期間は折しも8/9のNational Dayを控えて数々のeventのrehearsalがおこなわれ、国中（街中）喧騒の渦の中にあった。滞在したホテルは同国の銀座ともいえる目抜き通りのOrchard Road. に近かったため、一歩外にでると通常の外国人観光客（日本人が目立つ）に加えて、週末には若いシンガポリアンでごった返していた。幸いNUSは最新鋭の地下鉄（MRT）で10分ほど郊外に出た所にあり、静かであった。

NUSはその前身を含めると、1907年創立と歴史は比較的古いのが、郊外のこの地に移転して今年で丁度10年目とのことである。14000人の学生が学ぶキャンパスは、本郷の約4倍ほどの広さの敷地の中に、落ち着いた建物が緑の中に良く調和して配置され、garden city にふさわしい大学で

ある。教職員およびそのゲスト専用の食堂を中心とした会館が学内に二カ所ほどあり、常設のバー、ビリヤード場、スポーツクラブなどが併設されている。圧巻はプールで、これは学生も1\$（約80円）払えば入場できるが、オリンピック級の設備を備え、50m方向に自由に泳ぐことができた。日頃、御殿下で対向者を気にしながら泳いでいた筆者も、水着を持参した甲斐があった。

Tan 助教授の研究室(Surface Science Lab.)は、2年前に英国VG社製の超高真空分析装置を導入し、X線光電子分光(XPS)、走査型オージェ電子分光(SAES)、二次イオン質量分析(SIMS)を手法として、有機物表面における電荷移動を主たる研究テーマにしていた。Surface Science Lab.には、物理、化学、電気、工業化学などの学科から、9名ほどの研究者がそれぞれの研究テーマで参加しているが、同研究室の専任研究者は、Tan 助教授、Research Officer(Ph.Dを有し、助手にあたる)、大学院生2名の4人

で、発足して2年にしてはRefereed Paperも数通発行されていて良くやっているという印象を受けた。ただ物理は就職口は教師ぐらいしか無く、医学、法学、電気工学の方面へ優秀な学生がいてしまうとTan助教授は嘆いていた。筆者は同研究室滞在中、物理学科の表面科学セミナーで、電子線エネルギー損失分光による表面研究、という題の講演をおこなった。

その打ち合わせが今回の訪問の目的の一つであったJSPS-NUS表面科学セミナーは、今秋11/13日から3日間の予定で本学山上会館でおこなわれる。参加予定者はシンガポール側から9名、日本側からは東大を中心に約10名である。理学部からは物理、化学からあわせて5人が話をする予定である。日本側の責任者は化学の小間教授である。興味を持たれる方は同教授あるいは筆者まで連絡されたい。最後になったが、今回の訪問に際して、事務的な労を取ってくださった理学部事務の研究協力掛の人々に感謝したい。